

## ターン管理と発話連鎖への期待に関する一考察： 韓日接触場面における情報要求場面を中心に

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 梅木 俊輔   |
| 雑誌名 | 言語科学論集  |
| 巻   | 13  |
| ページ | 71-82   |
| 発行年 | 2009-12-01  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10097/48320">http://hdl.handle.net/10097/48320</a> |

# ターン管理と発話連鎖への期待に関する一考察 —韓日接触場面における情報要求場面を中心に—

梅 木 俊 輔

キーワード: 接触場面、韓国人、情報要求、ターン管理、期待

## 要 旨

韓日接触場面会話で相手に情報を求めている発話連鎖について、さらに質問を重ねる発話と自ら情報を提供する発話の頻度を会話参加者間で比較し、会話展開の仕方が異なるかどうかを検証した。その結果、日本人は主に自ら情報を提供する発話により会話を展開させるのに対し、韓国人は自ら情報を提供する発話と情報要求を重ねる発話の両方を同程度用いることが明らかとなった。この結果から接触場面に生じる会話の流れが滞る要因を双方の視点から考察することを試みた。

## 1. はじめに

接触場面において日本語学習者(NNS)が母語話者(NS)と行うコミュニケーションに不自然さを感じさせる要因には様々なものがある。発音、イントネーション、文法といった個々の文レベルで問題がなくても、談話レベルの問題によってもスムーズな流れが阻害される。それはガンパーズが述べているように、コミュニケーションが社会的活動であるがゆえであろう(ガンパーズ, 2004, p. 1)。例えば以下の例<sup>1)</sup>はNNSが前日に見学した空手の演舞について、演舞を行った空手部に所属するNSに対し、話題に取り上げている部分である。例1では発問者が質問への応答に相づちのみを使用すると、質問されたことに答えたNSはそのようなNNSの発話から次の展開につながる情報が得られないため、会話の流れに滞りが生じている。

### 例1

|        |          |
|--------|----------|
| 059NNS | 昨日(.)空手? |
| 060NS  | あ(.)空手   |
| 061NNS | いましたか    |
| 062NS  | あ(.)いました |

|        |             |
|--------|-------------|
| 063NNS | あ：そうですか： ←  |
| 064NS  | h h h いました  |
| 065NNS | へ：          |
| 066NS  | あ (.) いました？ |

相づちに関して橋内(1988)は、話し手が聞き手からのフィードバックに注意し、相づち等の反応で聞き手が関心を持っているのかどうか判断していることを述べているが、例1のNNSの発話に見られるように相づちのみでは次の展開へとつなげていく上で不十分となる場合がある。そのため先行研究では、以下に示す例2の←の箇所に見られるように、会話指導において簡単なコメントや短い発話を加えた形式<sup>2)</sup>を指導する必要性が指摘されている(伊藤, 1993)。

### 例2

|        |                                |
|--------|--------------------------------|
| 127NS  | 韓国の化粧品とか日本より高いですか              |
| 128NNS | あ：そうですね：韓国の化粧品はま：そういう美容 (.) 高い |
| 129NS  | あそうですか (.) 日本もそうだと思いますけど ←     |
| 130NNS | 日本のテレビでよく韓国の化粧品紹介されてたり         |
| 131NS  | あ：                             |
| 132NNS | (. . . .) クリームとか               |
| 133NS  | h h h h                        |

しかしながら実際に指導する際のことを考えると、例えば「スムーズにコミュニケーションを運ぶために特定の表現形式を増やす」というのみでは、やり取りのスムーズさに結びつかない場合もあるのではないだろうか。それは言語が何であるにせよ、NNSのみならずNSにおいても接触場面という異なる社会の住人同士の相互的なやり取りに自社会のやり方を持ち込みがちなことによる場合もあるためである。むしろその際に重要となるのは「どのような点が母語場面からの影響で、どのような点が日本語能力の制限によるものか」(楊, 2007)を自ら認識できることであろう。ただそのためには実態が明らかにされねばならない。この点に関し従来の先行研究は接触場面における両者間のコミュニケーション形態の相違を指摘し、そこから生じる問題をNS側の視点のみから捉えたものが多く、同じ問題をNNS側の視点から取り上げて論じているものは少ない。

本稿は接触場面における母語場面からの影響を検討する一環として行った事例研究である。具体的には初対面の韓日接触場面に生じた相手に情報を求めている情報要求の発話連鎖について両者間での会話展開の仕方が異なるかどうかを検証する。その結果をもとに問題となった会話の流れの滞りを考察することで、要因として、両者の当該発話連鎖に対する典型的な期待の異なりが作用する可能性があることを述べる。

## 2. 問題の所在と先行研究

### 2-1. 問題の所在—NNSによる相づちと会話の流れの滞り

前掲の例1に対し以下に示す例3のように、質問に対する応答の聞き手とならない場合であれば相づちのみを主体とした発話を行っていたとしても滞りは感じられない。それはここでの発話連鎖が例1のように一方が他方に質問し、他方がそれに応答するという形(情報要求の発話連鎖)で進行するのではなく、質問により要求されたわけではない陳述を他方が聞くという形(陳述の発話連鎖)になっており、相づちを打たれる側からすると自分の陳述に対し、相手が勝手に相づちを打っているだけであることによる。

#### 例3

|        |                           |
|--------|---------------------------|
| 145NNS | 羨ましいね:ほんとに羨ましい(.)何でかというと: |
| 146NS  | はい ←                      |
| 147NNS | 韓国は今20歳代の大学生が多すぎて:        |
| 148NS  | ((うなづく)) ←                |
| 149NNS | 働いている人があんまいなくて:           |
| 150NS  | ((うなづく)) ←                |
| 151NNS | 学生達は消費しかないんですね:           |
| 152NS  | ((うなづく)) ←                |

例3に見られるように聞き手の発話が相づちのみであったとしても、それが常に問題となるわけではない。ただし同じ相づちのみの発話であっても問題になる場合とならない場合があるのだとすれば、例1における滞りが単に発話の情報量的不十分さだけによるものではないことを示すことは重要な点となる。だとすると情報要求の

発話連鎖でNNSが相づちのみを発話することにより問題が生じるのはなぜか。例1において相づちを打たれるNS側から考えてみると、相手の情報要求(061NNS)に対してターンを取って応答を行っているが(062NS)、その応答に対し、応答の受け手となる者によって相づちのみが発話される(063NNS)。しかし相づちはターンを取る発話として見なされないことから、いわばNSの応答がNNSにスルーされた格好になっている。ここでいうスルーとは下の例4のように、NSが行った応答(111NS)に対しNNSがさらに情報要求を行うような明示的なターンの譲渡(112NNS)のことではない。

#### 例4

- |        |                       |   |
|--------|-----------------------|---|
| 108NNS | 札幌で何かおいしいものとか有名なもの    |   |
| 109NS  | そうですね：                |   |
| 110NNS | ラーメン                  |   |
| 111NS  | h h h ラーメン (.) ジンギスカン |   |
| 112NNS | ジンギスカンおいしいですか         | ← |
| 113NS  | ちょっと苦手なんですけど：         |   |

明示的なターンの譲渡を行うことはそれ自体ターンを取って行っており、その結果としてターンを取らない(相手にターンが渡る)こととなる。そのためターンを管理していると言える。以上の内容をまとめると、情報要求の発話連鎖における応答に対し、ターンを管理するべき者が相づちのみを発話した場合、相づちのみはターンを管理する発話ではないため、その後の会話は滞るということである。

ではそこからもう一步踏み込んだ場合に疑問となってくることとして、なぜ例1のNNSは滞りを誘発するような発話を選択したのかということがある。以下この点について両者の間で情報を要求する際の発話連鎖における展開が異なっていることを示した上で、「NNSがターンを管理しなかったこと」というより「NSにターンを譲った」と見なしうることを示す。

## 2-2. 先行研究

普段、我々が会話する際、自分が言うことに対して相手が何を言うかということは、相手が最後まで言い切らずに終えてしまった場合でも、相手の言わんとすることが分かったりする。これらは推論により可能となることであるが、ガンパーズは会話

の推論を「相互行為の参加者がお互いのコミュニケーション上の意図を算定し、自分の反応の基礎とする、状況に根ざし、コンテキストに拘束された解釈のプロセス」として定義している(ガンパーズ, 2004, p. vii(日本語版への序文))。なおこのような会話の推論を引き出す能力は、「慣れ親しんだ場面や新しく出会う場面での長期にわたる相互行為を通してのみ獲得される背景的な知識によっている。」(ガンパーズ, 2004, p. vii)とされている。本稿ではガンパーズに倣い初対面同士の会話参加者が会話する際に参照するものとして期待を取り上げるが、ここで取り上げる期待とはガンパーズのいうプロセスとしての会話の推論ではなく、それが基づく背景的な知識を指して用いる。またそのような知識として見なす内容としては広範なものが含まれるが、ここでは特に初対面の相手と友好的な関係を築こうとする者が継続させる発話連鎖に対するものを対象とする。

一方、知識や期待といった内的側面ではなく、実際に初対面の相手と新たな関係を築くやり取りを行う際に頻繁に見られる発話連鎖として情報要求の発話連鎖があげられるが、先行研究では日本語による接触場面では母語話者となる日本人の方が相手より多くの質問をすることがこれまでに指摘されている(佐々木, 1998, 中井, 2002)。しかしこうした傾向は相手となるNNSによって異なることが予想される。奥山(2005)では韓国人と日本人を対象に同国人同士による会話(以下、内的場面)を比較した結果、開始後5分間のうち、韓国人は相手への質問で話題が導入されることの方が自分のことについての情報を提供する発話で話題が導入されることよりも多く、日本人同士の場合と逆の結果となることが報告されている。また申(2006)では奥山同様、内的場面において情報を受信する側の言語行動を比較した結果、日本人は情報要求を通して話題を展開していくことは少ない一方、韓国人は相手に対し積極的に情報要求を行うことで話題展開を試みることが述べられている。

これらを踏まえると、初対面の相手と友好的な関係を構築するために継続させようとする発話連鎖は当人が属す社会によって異なっており、それら社会ごとに発話連鎖に対して個々があつ「こういうものが典型的である」といった知識(=期待)も異なっていることが予想される。

以上のように考えると、前述において問題視されることとなったNNSの行動の理由に対しても別の観点からの解答が与えられるのではないだろうか。ではNNSとNSにおいて想定される期待とはどのように異なるのか。この点に関し以下では日韓接触場面における両話者の情報要求発話連鎖の展開の仕方を対象に比較分析を行った

結果を述べる。

### 3. 資料と分析方法

#### 3-1. 資料

初対面の同性同士1対1による日本人(NS)と韓国人(NNS)の自由会話8組(1組20分程度)を録画し文字化した。会話の録画を行ったのは2000年8月である。録画当時、NSとNNSはともに20～22歳であり(男2名:女6名)、NSは国内の大学に在籍、NNSは韓国の大学に在籍する大学生である。NNSの日本語レベル<sup>3)</sup>については全員上級レベルである。

#### 3-2. 分析方法

本稿ではNSとNNSが会話においてどの程度情報を要求し合うのか、およびその際の発話連鎖における展開の仕方に注目する。そこでまず各ペアの会話全体から相手発話に対する意味交渉に類する質問や繰り返しを除いた全ての情報要求発話を抜き出し、それらがNNSとNSのどちらによるものかを分類した。その後、カウントした両者の情報要求について、「さらに情報要求を重ねる」発話(以下、要求)および「自らが情報を提供する」発話(以下、提供)をそれぞれカウントした。

### 4. 分析結果と考察

#### 4-1. 情報要求発話の頻度と展開の仕方

以上の分類基準によりそれぞれを分類した項目数を以下に示す。表1は各ペアの会話全体から抜き出した情報要求発話数を100とし、NSとNNSがどの程度行ったかについて割合を示している。

表1 情報要求発話の割合

|     | A     | B     | C    | D     | E     | F     | G     | H     | 平均      |
|-----|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|---------|
| NS  | 45.8  | 34.3  | 10.0 | 62.5  | 78.6  | 42.9  | 33.3  | 43.3  | 46.4    |
|     | 11/24 | 12/35 | 1/10 | 15/24 | 22/28 | 9/21  | 8/24  | 13/30 | 91/196  |
| NNS | 54.2  | 65.7  | 90.0 | 37.5  | 21.4  | 57.1  | 66.7  | 56.7  | 53.6    |
|     | 13/24 | 23/35 | 9/10 | 9/24  | 6/28  | 12/21 | 16/24 | 17/30 | 105/196 |

韓国人と日本人による接触場面会話ではNSによる情報要求が平均46.4%であるのに対し、NNSは53.6%となっている。ここでの結果を見る限り、接触場面における20分程度という時間内で生じている全情報要求発話数に関して、両者の間でほとんど差は見られない。

表2 情報要求を行う際の展開の仕方

|     | A  |    | B  |    | C  |    | D  |    | E  |    |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
|     | 要求 | 提供 |
| NS  | 4  | 7  | 5  | 5  | 0  | 1  | 4  | 10 | 8  | 12 |
| NNS | 6  | 6  | 12 | 9  | 3  | 6  | 4  | 3  | 1  | 5  |

| F  |    | G  |    | H  |    | 平均  |     |
|----|----|----|----|----|----|-----|-----|
| 要求 | 提供 | 要求 | 提供 | 要求 | 提供 | 要求  | 提供  |
| 2  | 7  | 3  | 5  | 3  | 5  | 3.6 | 6.5 |
| 2  | 9  | 9  | 5  | 9  | 6  | 5.8 | 6.1 |

続いて両者が情報要求を行う際における展開の仕方を見ると、表2よりNSでは要求の平均が3.6であるのに対し、提供は6.5となっており、NSが相手の発話に対し「さらに情報要求を重ねる」発話より「自らが情報を提供する」発話によって展開させていることが多いことが分かる。以下の例5は←の箇所NSが相手の応答に対し自らが情報を提供することによって話題を展開している例である。なおこのような日本人のスタイルに関し、任・井出(2000)では「まずは相手の自己開示を促すような間接的な質問をする。そしてその反応に合わせて話を進める「待ち」の手法を好んでいる」(任・井出, 2000, p. 103)と述べられている。

例5

- 049NS 日本に興味とかがあってあったんですか。(.) 日本語  
 050NNS あ：う：ん。(.) わたしは：日本語の翻訳者とか：興味があつて：  
 051NS うん  
 052NNS わたしの友達も日本に来て：それが能力になったから：  
 053NS へ：(.) 去年何かうちの何になるのかなあ：わたしのははお母さんの  
 いとこ ←

- 054NNS はい  
 055NS その人が何か韓国に旅行に行つて来て： ←  
 056NNS うん  
 057NS 娘さんとふたりで：それで何かお土産に：何か大根 ←

一方、表2におけるNNSを見ると、要求の平均が5.8であるのに対し提供が6.1であることから、NSとは異なりNNSは相手の発話に対し「さらに情報要求を重ねる」発話と「自らが情報を提供する」発話をほぼ同程度用いながら展開させている。ただ同じ項目同士をNSとNNSで比較した場合、提供の平均は両者で変わらないものの、要求の平均についてはNNSの方が若干高くなっている。こうしたことからすると、接触場面におけるNNSは情報要求を行う際、NNSのように相手の発話に対し主に「自らが情報を提供する」発話によって展開させるというより、「自らが情報を提供する」発話と「さらに情報要求を重ねる」発話の両方によって展開させていると考えられる。以下に示す例6および7はNNSによる情報要求により導かれた話題中、さらに質問を重ねることで話題を展開させている例(例6)と相手の応答に対し自らが情報を提供する例(例7)である。

## 例6

- 009NNS 専攻は何を勉強していますか  
 010NS 日本語教育  
 011NNS あ：ここ  
 012NS この：研究室で：  
 013NNS 日本語教育（.）先生になりますか： ←  
 014NS まだまだ決まなくて：日本語教師とかも：ちょっと考えてはいるんですけど：  
 015NNS あ：韓国に来て日本語教師どうですか ←  
 016NS え：

## 例7

- 143NNS 他の学科はどうですか
- 144NS 他のところは：ま：定員（.）最大が15人なんですけど（.）ま：15人いっぱいいるところもあれば：10人ぐらいのところも
- 145NNS 羨ましいね：ほんとに羨ましい（.）何でかというと： ←
- 146NS はい
- 147NNS 韓国は今20歳代の大学生が多すぎて： ←
- 148NS （（うなずく））
- 149NNS 働いている人があんまいなくて： ←
- 150NS （（うなずく））
- 151NNS 学生達は消費しが少ないんですね： ←
- 152NS （（うなずく））
- 153NNS ま：ですので（.）ま：わたしの日語日文化でも人が少なくともま：70名 ←
- 154NS 70名
- 155NNS はい（.）他の学科だったらま：400名とか ←
- 156NS ふ：ん

なおNNSにおいて情報要求が多用されることは任・井出(2000)において韓国人にとって「具体的かつ直接的な質問は、相手への関心をはっきり示すことにつながり、それが親近感を生み出すと捉えられている」「たとえ初対面の相手でも、あれこれと聞き出しそこからさらに話を進め、まるで旧知の仲であるかのように会話を続けることを好む」(任・井出, 2000, p. 103)ということが指摘されている。しかしながら任・井出(2000)は内的場面のみを取り上げており接触場面における行動を検討している本稿の結果からすると、NNSにおいて情報要求が情報提供より優先的に用いられているとはいえ、むしろ接触場面ではNNSがNSの展開のさせ方に近づいているようにも思われる。この点に関するより詳細な検討は稿を改めることとしたい。

#### 4-2. NNSとNSにおける期待のずれ

ここまでの内容をもとに、NSとNNSの初対面時における情報要求の発話連鎖についてモデルとして図示したものが以下の図1である。

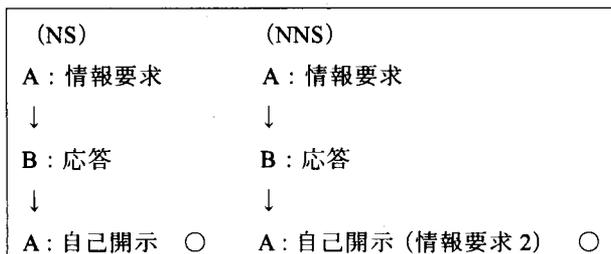


図1 情報要求の発話連鎖モデル

上記モデルはあくまでモデルであって実際にNSとNNSが常にここで示すようなやり取りを行っているわけではない。しかし我々が初対面の相手と友好的な関係を築こうとする際にはこうしたモデルが「慣れ親しんだ場面や新しく出会う場面での長期にわたる相互行為を通してのみ獲得される背景的な知識」(ガンパーズ, 2004, p. vii)として参照され、発話連鎖への期待を生み出すものとして働いていると考えられる。以下、このモデルを利用することで本稿で取り上げた疑問に対し、NSとNNSの両者の観点から説明することが可能となることを示す。

### 4-3. 問題に対する解答

ここで再度、本稿で解答しようとする疑問点について述べておく。例1の情報要求の発話連鎖における応答に対し、ターンを管理するべき者が相づちのみを発話した場合、相づちのみはターンを管理する発話ではないため、その後の会話は滞ることは既に見た。そしてそこから導かれた問題は上のようなやり取りの際においてNNSが滞りを誘発するような発話を選択したのはなぜかということであった。

例1の連鎖はNSの側から見ると上記モデル図においてBの位置にいる自分の発話に対し○の位置におけるNNSの発話が相づちのみとなり、さらに続きを言うよう促されているかのように見えるが、NSにとって○の位置でそのような反応を聞くこと(あるいは逆の立場であった場合に自身がすること)は事務的手続きとして、氏名や連絡先といった情報についてやり取りを行う場合などでない限り、相手から求められる情報のみ応答する必要はなく極めて不自然なことと言えよう。

端的に言えばNS側から見て○の位置でターンを譲るということがあり得ないために問題となるのだが、一方で図1のようにNNSとNSで期待が異なっているとすれば、NNS側の視点からすると当該位置でターンを譲ることも不思議なことではない。

なぜなら仮にNNSがNSとは異なる情報要求を重ねるモデルに基づいた場合、NSとの相違から自分ばかりが質問していると認識されることで、質問することが憚られ、相手にターンを譲ることも生じうることとなるためである。これは互いに質問し合うことを常とする者からすれば自分が質問しなければ相手がするだけと考えたとしても別段不思議ではないであろう。

## 5. まとめと課題

以上、初対面の接触場面において情報を求める発話連鎖を対象に、NSとNNS間でさらに質問を重ねる発話と自ら情報を提供する発話の頻度を比較した結果、NSが主として自ら情報提供する発話によって展開させるのに対し、NNSはNSと異なり情報要求を重ねる発話を同程度用いながら展開させていることが分かった。またこれらの結果をもとにNNSによる情報要求の発話連鎖中に生じた会話の流れの滞りを考察することにより、NS側からすれば「NNSがターンを管理しなかったこと」がNNS側からすると「NSにターンを譲った」と見なしうることが示唆された。これらの要因に見られるように接触場面では参加者の双方が内的場面のスタイルを持ち込むことで問題が生じる。そのような自スタイルの持ち込みはやり取りに対する典型的な期待を双方ともに無意識に持ち込むことで起こる可能性がある。

したがって実際の指導においては、例えば「スムーズにコミュニケーションを運ぶために特定の表現形式を増やす」というのみではなく、「どのような点が母語場面からの影響で、どのような点が日本語能力の制限によるものか」(楊, 2007)をNNS自らが認識し相互行為を調整していけるようにすることが重要であろう。

しかしながら本稿で述べたような接触場面における期待を実際にNNSがもっているかどうか、またNSとNNSの間に相違があるのかどうかという点については8人という限られた被験者の表面上に現れた行動から推測したものに過ぎない。検証方法にはNSとNNSの両者に対する会話後のフォローアップインタビューや発話連鎖上の特定の位置にどういった発話が入るのが自然かを問う談話完成テストを工夫することなどが考えられるが、方法の検討を含め今後の課題としたい。

## 注

<sup>1</sup> 例の出典は本稿3.1.資料を参照。

<sup>2</sup> 伊藤(1993)は次の5種類をあげている。a. 相づち詞の繰り返し、b. 「ええ、そうです」の変種、c. 話し手の言葉の繰り返し、d. バックチャンネルの後に短い発話が続く形式(変化させた繰り返しを含む)、e. 繰り返し

に短い発話、あるいは聞き返しを付け加えた形式。

<sup>3</sup>NNSは全員、筆者所属研究室で行われた夏季日本語講座の参加者であり、その際の参加クラスをそのままレベルとしている。

<sup>4</sup>トランスクリプトの表記はGail Jeffersonにより開発されたものをベースに若干の改定を加えたもの(申田・定延・伝, 2008, pp. x iii - xxi.)を使用している。

丸括弧内のドットは、その位置にごくわずかの感知可能な間隙(おおむね0.1秒前後)があることを示す。発話中のコロンは、直前の音が引き伸ばされていることを示す。コロンの数は、引き伸ばしの相対的長さを示す。

<sup>5</sup>疑問符は、直前部分が上昇調の抑揚で発話されていることを示す。

<sup>6</sup>下線部分が強調されて発話されていることを示す。例えば、同じ話者の前後の発声に比べて音量が大きい場合や、音が高くなっている場合など。

<sup>7</sup>小文字のhは呼気音を示す。呼気音の相対的長さはhの数で示す。この記号は「ため息」「笑い」などいくつかの種類の異なるふるまいを示す。

<sup>8</sup>全く聞き取れない発話は、丸括弧の中に点線で示す。発話の長さを示すときには点線の長さによって示す。

<sup>9</sup>転記者によるさまざまな種類の注釈・説明は、すべて二重丸括弧で囲って示す。

## 参考文献

- 橋内武(1988)「会話のしくみを探る」『日本語学』3 (7), 明示書院, pp. 43-51.
- 伊藤博子(1993)「談話の指導:バックチャンネルからの展開」『日本語学』12 (3), 明治書院, pp. 78-91.
- ジョン・ガンパーズ(著)井上逸兵・出原健一・花崎美紀・荒木瑞夫・多々良直弘(訳)(2004)『認知と相互行為の社会言語学—ディスコース・ストラテジー—』松柏社.
- 申田秀也・定延利之・伝康晴(編)(2008)『「単位」としての文と発話』, ひつじ書房, pp. x iii - xxi.
- 中井陽子(2003)「話題開始部で用いられる質問表現:日本語母語話者同士および母語話者/非母語話者による会話をもとに」『早稲田大学日本語教育研究』, pp. 37-54.
- 任榮哲・井出里咲子(2000)「(連載)似ていて違う?ことばと文化の日韓比較(6)最終回—箸とチョコラカー—」『月刊言語』29 (9), 大修館書店, pp. 100-106.
- 奥山洋子(2005)「話題導入における日韓のポライトネス・ストラテジー比較」『社会言語科学』8 (1), pp. 69-81.
- 佐々木由美(1998)「初対面の状況における日本人の「情報要求」の発話—同文化内および異文化コミュニケーションの場面—」『異文化間教育』12, pp. 110-127.
- 申媛善(2006)「情報のやりとりにおける受信者側の働き—日本語話者と韓国語話者の比較—」『筑波応用言語学研究』13, pp. 85-98.
- 梅本俊輔(2009)「相づち使用とターン管理に関する一考察—接触場面の場合—」『第7回日本語教育研究集會予稿集』, pp. 42-45.
- 楊虹(2007)「中日母語場面の話題転換の比較—話題終了のプロセスに着目して—」『世界の日本語教育』17, pp. 37-52.